言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 金子幸代

論文題目 『鷗外と近代劇』

（単著、大東出版社[東京]、2011年3月31日刊行）

1. 本論文の構成

本論文『鷗外と近代劇』は、その重要性が指摘されながら研究が立ち遅れていた近代劇の視座から森鷗外の文学活動を総合的に解明したものである。これまで鷗外研究の重点は、小説や評論の分野に置かれ、演劇についての包括的な研究はなされていなかった。しかしながら、ドイツの観劇体験は、西欧の近代劇の翻訳・紹介につながるだけでなく、自らの劇作の契機となり、日本の演劇改良への提言にもつながる。しかも鷗外の観劇体験は演劇の領域にとどまらず、小説や評論の分野にも重要な影響を与えているのである。ドイツでの観劇体験は、書物を通しての西欧文化との出会いよりも直接的・全体的なものであっただけに、その影響は広く深く、また持続するものであったと言えよう。

鷗外はドイツ留学から帰国後すぐに日本演芸協会の文芸委員となり、演劇改良について積極的な提言を行っている。そのような姿勢にはドイツ留学時代の観劇体験が大きかったと考えられる。また、鷗外の多様な翻訳文学を検討するならば、ゲーテ、レッシング、ハウプトマン、イプセンなどの戯曲が多いことがわかる。鷗外の翻訳戯曲は自身の創作はもちろんのこと、当時の日本の文壇や演劇界にも大きな影響を与えたが、ドイツでの実証的な調査研究がなされていないためにこれまで十分な解明がなされてこなかった。鷗外の留学時代とその後の旺盛な文学活動をつなぐ糸口として演劇という視点を導入することによって、鷗外の多様な文学活動を新たに照射したのが本論文である。

本論文では鷗外の文学活動のなかでの近代劇の大きなうねりが捉えられるように、新聞の劇評、演劇雑誌、文芸雑誌などの総合的な視座から考察する三部構成になっている。第一部では留学時代と近代劇との関わりを総体的に把握するために鷗外の留学生活やドイツ三部作について考察した。第二部は帰国後の鷗外が戯曲の翻訳や創作に手を染めるようになる過程を演劇雑誌「歌舞伎」（明33.1～大4.1）と文芸雑誌「スバル」（明42.1～大2.12）から考察した。第三部ではイプセン劇が日本の近代劇の発展にいかに影響を与えたか、また女性雑誌における反響について論究した。さらに『プルムウラ』をはじめ女性を主人公にした創作劇執筆に至る背景を探るため、鷗外の女性論について考察した。

本論文は、A5 版 本文467頁、索引20頁からなり、以下の各章から構成されている。

はじめに

Ⅰ　近代劇との邂逅

序章　　鷗外の留学と演劇

第一章　　演劇・音楽・文学

一　留学最初の地･

二　Theater＜演劇体験について＞

三　Faust　in　Leipzig

第二章　　都市空間としてのライプツィヒ
一　町のランガージュ
二　身体としての空間
三　遊戯としての空間
四　シンボルとしての駅
五　集中と安息
六　都市の個性
第三章　　演劇都市・ドレスデン
一　ドレスデンの位置
二　ロオトとの交流
三　マドンナ
四　もう一人のエリスと『ファウスト』
五　『ファウスト』観劇
第四章　　青春の都市・ミュンヒェン―仕事と作品
≪一≫ ミュンヒェン時代の仕事―独文新資料
一　「麦酒の利尿作用」
二　劇場・「新設の照夜及換気法の利害」に関する実験
≪二≫ ミュンヒェン時代の作品『うたかたの記』―伝承の水脈―
一　マリイ・巨勢・ルートヴィヒ二世の物語
二　土着の神々
三　狂婦の歌
四　伝承の水脈
第五章　　管理都市・ベルリン―もう一つの『舞姫』
一　鷗外文学の源泉
二　ベルリンの光と影
三　眼だにあらば
四　『舞姫』のモデル
五　変遷する下宿
第六章　　『ミカド』から『ドン・カルロス』へ
一　喜歌劇『ミカド』
二　鷗外の観劇体験
三　劇場から俳優へ

Ⅱ　近代劇の創造

第一章　　帰国後の鷗外と演劇

一　演劇改良論争

二　「歌舞伎」と「スバル」

第二章　　演劇雑誌「歌舞伎」

一　新しい演劇総合雑誌

二　演劇への傾斜・明治二十年代

三　鷗外の翻訳戯曲

四　一幕物

第三章　　最初の創作劇『玉篋兩浦嶼』

一　窓と障子

二　『玉篋兩浦嶼』の舞台

三　目でわかる脚本作り

四　メディアミックス

第四章　　鷗外の翻訳劇

はじめに

一　ショルツ

二　シュニッツラー

三　若きウィーン派

四　ヴェデキント

おわりに

第五章　　劇の季節―文芸雑誌「スバル」の戯曲·

一　「スバル」における戯曲の位置

二　鷗外の影響

三　ソルネスからヒルデへ

第六章　　「スバル」の時代―鷗外と平出修―

はじめに

一　戯曲

二　戯曲紹介

三　小説

四　修の死と「スバル」の終刊

第七章　　「スバル」創刊と創作劇『プルムウラ』

一　文壇復帰最初の創作劇

二　姉の力・プルムウラが語るもの

三　演劇の言葉の実験

四　姉型ヒロインの誕生

第八章　　対話劇『さへづり』―「椋鳥通信」から創作劇へ
はじめに
一　女性文化・情報の宝庫
二　女性雑誌への反響
三　『さへづり』の対話へ
第九章　　鷗外の翻訳劇・創作劇上演年表

Ⅲ　ノラの変容

第一章　　イプセン劇と「歌舞伎」
一　俳優養成学校
二　真の翻訳時代
三　時間とのたたかい
四　近代女優の誕生
第二章　　ノラたちの戯曲―「青鞜」「女子文壇」のノラ批評
はじめに
一　「女子文壇」における『人形の家』論
二　「青鞜」の『人形の家』特集号
三　女性問題の深化と広がり
第三章　　日本のノラ―『人形の家』受容をめぐって
プロローグ
一　『人形の家』の位置
二　イプセンの移入
三　日本のノラ
四　もう一人のノラ
エピローグ
第四章　　世界のノラ―「母性」からの解放
一　世界のノラ
二　日本のノラ批評
三　イプセン劇の影響
おわりに
第五章　　鷗外の女性論―二十一世紀への架け橋
はじめに
一　鷗外のドイツ留学
二　ナウマン論争
三　帰国後の鷗外

四　女性文学の登場
五　新しい批評への道程
六　運命を切り拓く女性像
七　女性論の紹介
おわりに

2. 各章の内容

以下では，各章の内容について述べていきたい。

第一部「近代劇との邂逅」では、鷗外が演劇に深い関わりを持つ大きな契機となったライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヒェン、ベルリンの四都市での実地調査研究に基づき、鷗外のドイツ留学時代について究明した。

鷗外のドイツ留学時代の体験は、『舞姫』(明治 23.1)、『うたかたの記』(明治 23.8)、『文づかひ』(明治 24.1)のドイツ三部作に反映されているだけでなく、帰国後の演劇改良論争の土台になっていることを「はじめに」や序章の「鷗外の留学と演劇」で考察した。一章の「演劇・音楽・文学」では、留学最初の地であるライプツィヒ時代の鷗外の足跡を知ることができる新資料をもとに、鷗外の観劇体験について明らかにした。二章の「都市空間としてのライプツィヒ」では、ロラン・バルトの都市記号論をもとに若きゲーテも学んだライプツィヒで留学生活を送る鷗外の生の軌跡を明らかにした。三章「演劇都市・ドレスデン」では帰国後の文学や演劇に対する目が培われたのがドレスデン時代であったことを新資料に基づき明らかにした。四章「青春の都市・ミュンヒェン」では、これまで調査の進んでいなかったミュンヒェン時代の鷗外のドイツ人との交流、医学研究に照明をあてた。さらに「『うたかたの記』―伝承の水脈」においては、作品の舞台となったミュンヒェン・シュタルンベルク湖の伝承を鷗外がいかに取り入れて作品化したかを新資料をもとに解明した。五章「管理都市・ベルリン」では、留学時代の日記である『獨逸日記』と創作、特に『舞姫』との関係を究明した。六章「『ミカド』から『ドン・カルロス』へ」は、ドイツ留学時代に鷗外がどのような劇空間の中にいたのか、ジャポニズムの『ミカド』初演やシラーの傑作『ドン・カルロス』観劇など、鷗外の実際の観劇体験を調査し、実証的に解明した。

第二部「近代劇の誕生」では、ドイツ留学から帰国した鷗外と演劇との関わりを実証的に究明した。近代劇の発展の上で鷗外が果たした役割を演劇雑誌「歌舞伎」と文芸雑誌「スバル」から総合的に明らかにした。

鷗外は帰国の翌年、一八八九年（明 22）八月に日本演芸協会の文芸委員になり、演劇改良運動に積極的に発言していく。そこで一章「帰国後の鷗外と演劇」では、明治二十年代に鷗外が演劇改良論争の中でどのような演劇を目指していたか、留学時代の観劇体験が演

劇改良論争にどのように反映されていたかを究明した。さらに次章以降で論じる演劇雑誌「歌舞伎」と文芸雑誌「スバル」との関係について概観した。二章の「演劇雑誌『歌舞伎』」では、明治三十年代に発刊された三木竹二（鷗外の弟、篤次郎）が主宰した「歌舞伎」における鷗外の演劇についての発言や鷗外の翻訳戯曲の意義について考察した。

三章「最初の創作劇『玉篋兩浦嶼』」では、最初の創作劇の意義と演劇雑誌「歌舞伎」の劇評、またメディアミックスとしての「歌舞伎」の役割を解明した。四章の「鷗外の翻訳劇」では、日本における近代劇の発展に果たした鷗外の役割を明らかにするために「歌舞伎」に掲載された明治四十年から四十一年の鷗外の翻訳戯曲を調査研究した。

五章「劇の季節―文芸雑誌『スバル』の戯曲」では、文芸雑誌「スバル」全六十冊を調査分析し、「スバル」において戯曲がいかに重要な位置を占めていたかを論証し、鷗外の影響を解明した。『プルムウラ』（明 42．1）を皮切りに最初の現代劇『仮面』（明 42．4）や平易な現代語を用いた最初の史劇『静』（明 42．11）など精力的に戯曲を発表する鷗外の劇に対する意欲を読み解いた。六章「『スバル』の時代―鷗外と平出修―」では、「スバル」の編集発行人であった平出修と鷗外の文学上の交流を雑誌との関係から分析した。

七章「『スバル』創刊と創作劇『プルムウラ』」は、「スバル」創刊号の巻頭を飾る『プルムウラ』において文体にも工夫を凝らし、既成の戯曲の枠組みにとらわれない新しい戯曲の創造を行っていたことを明らかにした。八章「対話劇『さへづり』―『椋鳥通信』から創作劇へ」では、鷗外が「スバル」に五十五回にわたって連載した西欧文化の情報通信である「椋鳥通信」の内容を検討し、対話劇『さへづり』（明 44・3）との関わりを解明した。

九章「鷗外の翻訳劇・創作劇上演年表」では、実際に上演された鷗外の翻訳劇や創作劇の調査研究を行い、明治四十年代から大正五年にかけての上演状況を明らかにした。

第三部「ノラの変容」では、イプセン劇が日本における近代劇の発展にいかに重要な位置を占めていたかを究明した。

一章「イプセン劇と『歌舞伎』」では、イプセン劇の日本での初演時の状況について究明した。特に『人形の家』については劇評が掲載された「歌舞伎」を中心に考察し、演劇の新時代を担う近代女優の誕生に至る日本におけるイプセン劇の受容について考察した。二章「ノラたちの戯曲―『青鞜』『女子文壇』のノラ批評」では、『人形の家』の上演時の反響について女性雑誌の先駆となった「女子文壇」と「青鞜」から考察した。

三章「日本のノラ―『人形の家』受容をめぐって」では、女性雑誌以外にも視野を広げ、日本における『人形の家』の受容を究明した。さらに日本においてイプセンの翻訳がどのように行われてきたかを解明するために「イプセン翻訳年表」を作成した。『人形の家』の翻訳については抱月訳と鷗外訳を分析し、翻訳にあたっての二人の作品解釈の相違を明らかにした。さらに四章「世界のノラ―『母性』からの解放」では、『人形の家』が日本や世界においてどのような受容がなされていたか比較文学的考察を行った。鷗外が翻訳している『人形の家』の主人公ノラが、「新しい女」の象徴的存在であったことを究明した。

五章「鷗外の女性論―二十一世紀への架け橋」では、『プルムウラ』をはじめ女性を主人

公とする創作劇の執筆に至る一九一〇年までの鷗外の女性論を分析し、鷗外の文学的営為に新たな照明をあてた。

以上の本論文でとりあげた概要、重点について最後に述べていきたい。

一八八四年（明 17）から一八八八年（明 21）までドイツに留学した鷗外は、衛生学と「陸軍医事」の研究に従事した。その間、鷗外が熱心に観劇していたことは、『獨逸日記』によって知ることができる。鷗外はライプツィヒには一八八四年十月二十二日から翌年の十月九日まで滞在し、フランツ・ホフマンのもとで衛生学の研究を開始した。鷗外が劇を見に行ったのは、ライプツィヒでの留学生活を始めて一カ月も経たない頃であったことが十一月十六日の日記に記されている。鷗外がライプツィヒ到着後間もなく、雪道もいとわずに劇場に足を向けたのは、新聞に掲載されたシェーンターン兄弟の往復書簡を読み、劇への興味をそそられたからだと考えられる。新聞は、いわば鷗外にとって劇世界への水先案内人となっていたのである。

ライプツィヒの次に滞在した芸術の都ドレスデンではさらに足繁く劇場に通うようになる。ドレスデン滞在は、一八八五年(明 18)十月十一日から翌年の三月七日までの五カ月にも満たない短い滞在であったが、鷗外はヴィルヘルム・ロオトの指導を受け、軍医学講習会にも参加するという多忙な研究の合い間をぬって劇場に通った。たとえば一八八六年(明 19)二月五日の日記には「劇ギヨオテの『フアウスト』を演す。往いて観る」と、勇んでゲーテの『ファウスト』を見に行った様子を記している。日記には劇場名は記されていないが、当時の新聞記事を調査したところ、『ファウスト』が上演されたのは旧市街にある宮廷劇場であることが明らかになった。この他、シラーの『ヴィルヘルム・テル』などドイツ古典劇の代表作を観劇している。その際に頼りとしたのが新聞の劇評であった。

当時の新聞を調査し、ドレスデン新聞の主筆劇評家を務めていたのがロベルト・プレルスであることがわかった。プレルスは、鷗外がベルリンに滞在していた一八八六年二月二十三日に友人の田中正平から贈られた『演劇文学史』の著者である。従来、プレルスの演劇論から鷗外が影響を受けた時期は帰国後とされてきたが、プレルスからの影響はドイツ留学時代、ドレスデン滞在時にすでに見られるのである。劇評の役割の大きさを、自らの観劇体験によって実感したのがドレスデンであった。

次の留学地、バイエルン州の都ミュンヒェンには、一八八六年三月七日から翌年の四月十六日までの一年余り滞在し、マックス・フォン・ペッテンコッファーについて衛生学を学び、医学上の業績を上げている。そのかたわら、ミュンヒェンに着いて早々の三月中に四回も劇場に通っており、劇への関心の深まりを知ることができる。ミュンヒェンは、イタリア建築の影響を色濃く受けており、劇場の内装も華麗なものであった。劇場が日常から解放される異次元空間の役割を果たしていたことを、鷗外が最も意識したのはミュンヒェンであった。鷗外はミュンヒェンでは、劇場の空調設備の実験にも参加し、その実験は

新聞にも取り上げられ、参加した医師の一人として鷗外の名前も掲載されている。

一八八七年(明 20)四月十六日に、ロベルト・コッホについて細菌学の研究に従事するために鷗外はベルリンに戻り、一八八八年(明 21)七月五日に帰国の途に就く一年三カ月近くベルリンに滞在したが、シェイクスピアの『ハムレット』やレッシングの『賢者ナータン』、シラーの『ドン・カルロス』などヨーロッパの代表的な古典劇を観ることができた。ここで鷗外は、俳優の演技力に目を開かされ、戯曲に生命を吹き込む俳優の役割を実感した。ベルリン時代の鷗外の演劇への関心は、舞台装置よりも戯曲に向けられ、舞台で語られる科白や戯曲を生きたものに変える俳優の存在感に向けられていくのである。

鷗外の多様な翻訳文学にはゲーテ、レッシングなどの戯曲が多いが、鷗外が戯曲に関心を持つようになった契機は、ドイツでの読書体験は勿論だが、以上のように留学時代に劇の本場で実際に劇に接したこと、さらには新聞に掲載された劇評や演劇関係の記事を読んだことが大きかったと言えよう。このようにドイツ四都市での観劇体験は、演劇に対する目を開かせ、鷗外は帰国後に演劇改良運動に積極的に関わっていくようになるのである。

ドイツ留学から帰国した鷗外は、帰国の翌年、一八八九年（明 22）八月に日本演芸協会の文芸委員になり、演劇改良運動に積極的に発言していくようになる。劇場という容れ物の模倣を進めようとする演劇改良会を批判し、劇場建設よりも戯曲に力を入れるべきことを主張した。鷗外は戯曲の劇場に対する優位性を説き、劇作家の自主性について言及し、演劇を文学における一ジャンルとして扱うことを提言した。日本演芸協会への鷗外の参加によって、低迷していた演劇改良運動は、近代劇の確立へと大きな一歩を踏み出すことになる。鷗外の主張は、劇場運営、舞台監督や俳優の実態について総合的な視野から歴史的に詳述した劇評家ロベルト・プレルスの『独逸演劇史』に負うところが大きい。「嗚呼、演劇の急流は戯曲中一波一瀾の美麗と細膩とを掩蔵すと。又云く。戯曲を作るものは其意を舞台上の便に注ぐこと愈多ければ、其詩品愈降り、其詩格愈頽る」（「再び劇を論じて世の評家に答ふ」）と、プレルスの論を引用して自説を補強しているのである。

明治二十年代の鷗外の演劇への発言は、戯曲の本質論から上演の問題まで多面的、具体的に論じており、説得力がある。鷗外は「役者のための脚本」ではなく、実際の上演とは距離を置いた「劇作家の独自性、戯曲の自立性」を主張した。楽劇（オペラ）よりも正劇（ドラマ）を重んじ、演劇改良に必要なことは何よりも戯曲の改良であると説いた。こうした鷗外の演劇改良論は、実際にドイツ留学時代に上演や新聞の劇評にふれる中で培われたものであった。「思軒居士が耳の芝居目の芝居」において、オペラを耳の芝居、正劇を目の芝居と区別した森田思軒の意見に、鷗外自身が留学時代に実際に観劇したドレスデンやミュンヒェンの劇場を例に挙げて異を唱えているのなどがその一例である。

一九〇〇年（明 33）一月、三木竹二が責任編集をつとめる演劇雑誌「歌舞伎」が創刊された後は、「歌舞伎」を主たる発表舞台として引き続き演劇に関する発言を活発に行っていくようになる。特に注目されるのは、鷗外の翻訳戯曲が「歌舞伎」に集中している点である。「歌舞伎」の魅力は、伝統演劇、歌舞伎の見巧者であった竹二と、ドイツの近代劇を実

際に見てきた鷗外という二つの音色がかもしだす清新なハーモニーであったと考えられる。「歌舞伎」での鷗外の翻訳戯曲は二十二作ときわめて多い。文壇復帰後の第一作となる現代小説『半日』（明 42・3）以前から、このように多くの西洋の戯曲を翻訳しているのである。鷗外の文壇への復帰は、先ず翻訳戯曲の発表からと見てよいだろう。このような鷗外の戯曲翻訳への熱意について考えるために、「歌舞伎」を本論文で取り上げた。

鷗外は演劇改良の視点から脚本を重視したが、「歌舞伎」においても、脚本は、劇評、型の次の項目に置かれ、重きが置かれている。その脚本の多くは、鷗外による西洋の戯曲の翻訳であった。鷗外の意欲的な戯曲の翻訳には、日本に近代劇を導入しようという積極的な意図があった。翻訳戯曲の梗概を発表しただけでなく、まだ日本に馴染みのない近代劇の理解を深める一助として、「スバル」に発表した創作戯曲について、執筆由来を「歌舞伎」に発表した。「歌舞伎」を中心とした戯曲の翻訳と並行し、戯曲の創作が「スバル」を中心として活発に行われ、さらに「スバル」に発表した創作戯曲の解説を「歌舞伎」に発表している。また「歌舞伎」に発表した翻訳戯曲の梗概を「スバル」に発表するなど、「歌舞伎」と「スバル」の連携の深さを跡付けることができる。鷗外には意識的に「スバル」と「歌舞伎」という両輪によって戯曲というジャンルを根付かせようという目論見があったと言えよう。

「歌舞伎」に鷗外は『脚本　我君』（明 40・10）、『短剣を持ちたる女』（明 40・11～12）、『猛者』（明 41・11）、『出発前半時間』（明 41・1、5、6）などの翻訳戯曲を精力的に発表している。一九〇九年（明治 42）六月には、易風社から翻訳戯曲集『一幕物』も刊行されている。活発に戯曲の翻訳をしたばかりでなく戯曲の創作も手がけ、一九〇九年（明 42）一月に「スバル」が創刊されると、鷗外の戯曲『プルムウラ』が巻頭を飾った。記念すべき創刊号に戯曲を書いているということからも、鷗外がこの時期いかに戯曲に力を入れていたかが知れよう。創刊号の鷗外の戯曲に触発され、「スバル」二号は戯曲特集号となり、木下杢太郎や与謝野晶子らが執筆している。「スバル」の前身「明星」が詩歌雑誌であったのに対し、「スバル」は詩歌のみならず、戯曲という新ジャンルの活況が顕著に見られる。

『プルムウラ』を皮切りに、鷗外は『仮面』（明 42・2）や『静』（明 43・11）など「スバル」に戯曲を次々に執筆している。このように戯曲の翻訳と創作が並行して行われ、この時期の鷗外の文学活動において戯曲が大きな位置を占めていたことがわかるであろう。しかも、鷗外の創作した戯曲のほとんどがすぐに上演されているのである。加えて鷗外の翻訳戯曲の上演は、一九〇七年（明 40）から一九一六年（大 5）までの十年間に五十回にも及んでおり、看過できないものがある。

「スバル」の若手への影響をはじめ、日本の近代劇の発展における鷗外の果たした役割は、第一に一幕物を始めとする戯曲スタイルの確立、第二に題材による戯曲の革新と題材を生かす演劇の言葉の実験にあった。さらにそれに留まらず、第三の点としては、『プルムウラ』に見られるように新しいヒロインの創造をあげることができよう。

明治にあっては、むしろ演劇は小説以上にエネルギーのある文学のジャンルだった。そ

れは一九〇九年(明 42) 十一月、小山内薫が主宰する自由劇場の旗揚げ公演のイプセン劇が文壇の注目を集め、また観客の多くの文学青年たちに興奮の渦を巻き起こしたという事実を見ても明らかだろう。その旗揚げ公演のイプセン劇が、他ならぬ鷗外の翻訳した『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』(「国民新聞」明 42・7・6〜9・6) であった。鷗外の翻訳劇は自由劇場の旗揚げ公演となっただけでなく、日本で最初に上演されたイプセン劇として近代劇の出発点を飾るのである。

その後、一九一一年 (明 44) 九月にイプセンの『人形の家』が島村抱月訳により文芸協会で上演され、ノラを松井須磨子が演じて評判となった。鷗外はその二年後、ヒロインの名を題に冠した『ノラ』(警醒社　大 2・11) を翻訳した。鷗外訳『ノラ』は、一九一三年(大 2)十一月に近代劇協会によって上演され、話題を呼んだ。『人形の家』の抱月訳と鷗外訳とではノラ解釈の上での相違がみられる。抱月の場合は、『人形の家』のノラが提起した問題を女性の問題として捉えたのに対し、鷗外の場合は女性だけの問題に留まらず、両性にまたがる人間全体の問題として捉えて訳出しており、それが二人の訳文の違いとなっているのである。

ノラが「母たる義務の前に人間として生きたい」と、夫や子供のいる家を出て行く結末は、観客に大きな衝撃を与え、文壇や演劇界にとどまらず、女性解放運動の先駆をなす「青鞜」の女たちにも大きな波紋を呼んだ。『人形の家』の初演は「青鞜」の創刊と重なり、ノラは「新しい女」の代名詞ともなって当時の社会に一大センセーションを巻き起こしている。そうした『人形の家』の反響は「女子文壇」や「青鞜」に顕著である。

『人形の家』の呼び起こした各国の波紋は、『人形の家』がその国独自の社会・家族制度や女性の位置を写し出す鏡の役割を果たしている。『人形の家』は、ただ単に文学上の一事件にとどまらず、世界的に同時代的に波紋を巻き起こしたという点で、近代社会における女性の問題を考える上で抜きにしては語れない作品となっている。

なお、鷗外の観劇体験を調査するためドイツで実際に留学当時の資料にあたり、ドイツの演劇状況の調査研究につとめ、今まで明らかにされていなかった留学中に鷗外が出席したドイツ最初の女性解放運動の総集会の新資料などを発見することができた。それ故、最終章では『プルムウラ』をはじめ女性を主人公とする創作劇執筆に至る一九一〇年までの鷗外の女性論を取り上げ、留学時代から時代を追って考察することでその意義を明らかにし、今後の研究への展望を示した。

鷗外研究においてはこれまで保守的な鷗外像が流布していたが、実際には自らの意志によって決断し、困難な状況を切り拓いていく女性たちの姿を多く創作の中に登場させている。たとえば『さへづり』(明 44・3) や『なのりそ』(明 44・8、9) で海外の女性解放運動の紹介や自由結婚の問題が取り上げられているように、明治四十年代のほとんどの創作劇において女性が中心に据えられている。この他にも「椋鳥通信」において海外の女性解放運動の紹介を積極的に行っていることは注目される。演劇についての記事も多く、今後「椋鳥通信」から鷗外の文学活動を解明していくことが重要となろう。